

Title	速水融著『江戸農民の暮らしと人生：歴史人口学入門』
Sub Title	
Author	飯田, 恭(Iida, Takashi)
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	2004
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.97, No.3 (2004. 10) ,p.449(147)- 453(151)
JaLC DOI	10.14991/001.20041001-0147
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-20041001-0147

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.



速水融 著

『江戸農民の暮らしと人生
——歴史人口学入門——』

麗澤大学出版会，2002 年，274 頁

本書は、著者の旧著『江戸の農民生活史——宗門改帳にみる濃尾の一農村——』（NHK ブックス 555，日本放送出版協会，1988 年）の新版（増補・改版）である。旧版は出版後間もなく売り切れとなり，その後もなお入手希望者が数多く存在したため，新版刊行の運びとなったという。つまり本書には，新版刊行に先立ち，すでに 14 年に及ぶ広く読まれた歴史があるのだ。しかもその歴史の根はさらに深い。旧版は，1969 年に放送された NHK 市民大学講座のテレビ番組の一部を基に書き下ろされたものであり，放送以来 19 年間にもわたる著者の「大難産の産物」であったという。とすると本書には，日本における歴史人口学のパイオニアである著者の斯学開拓史そのものが刻み込まれていると見てよいだろう。実際，著者自身，本書が「今や滔々たる流れになった歴史人口学への，源流の一つ」として位置づけられることを要請している（以上，「あとがき」より）。

まず本書の論旨を辿ろう。「はじめに」にあるように，本書のねらいは，旧美濃国安八郡西条村という，輪中地帯としての特徴をもってはいるが一見したところ平凡な，しかし安永 2（1773）年から明治 2（1869）年に至る 97 年間の民衆の生きざまを「これ以上求めうべくもないほど明確に示してくれる」宗門改帳を現在に残す一村を例に取りながら，近世後期の農民生活史を論述することにある。その際，著者は，宗門改帳から人口統計を作成し，個人や家族の行動を追跡することで，村民の日常生活を地道に再現することに力点を

くという。そのことは，江戸時代を，近代化を通じて克服・否定されるべき古い因習に彩られた暗黒時代として葬り去る歴史観に対抗しつつ，民衆の生活・行動・思考についてのできるだけ客観的な分析に基づき「新しい歴史」を提示しようとする著者の意図と関わる。それゆえ本書のねらいは単なる人口史にとどまらない。

こうした課題と方法が，第一章「民衆生活史と歴史人口学」において敷衍される。制度上・職業上・商売上必要な事柄や，突発的な事件については記録されるが，あまりにも日常化してしまったことは記録されないため，民衆の日常生活を知することは非常に困難である。そう前置きした上で，著者は，日本の江戸時代ほど（さしあたり量的に見て）史料の豊富な前近代社会は他にないという事実を指摘しつつ，江戸農民の日常生活に関する研究の可能性を示唆し，またその意義を強調する。その際，特定の問題（地主制成立・農民層分解・困窮・商品経済の浸透・百姓一揆など）は好んで扱うが，農民の日常生活をほとんど顧みなかったこれまでの近世農民史研究は，いわば「基礎工事抜き」の建築であったと位置づけられるのである。そうして著者は，近世農民の日常生活への一つの接近法として，宗門改帳を用いた「歴史民勢学」＝「歴史人口学」を提示する。ヨーロッパの歴史人口学が利用した教区簿冊がキリスト教の存在によって成立した史料であるのに対し，宗門改帳が日本におけるキリスト教禁止政策の産物であったという歴史の皮肉に言及した上で，著者は，宗門改帳について概説し，それに「現住地主義」（現在の住民台帳に類似）と「本籍地主義」（現在の戸籍に類似）との二つのタイプがあることに注意を喚起した。

ところで本書は，研究対象である西条村につき，もっぱら宗門改帳のみを用いて人口統計を作成し，民衆生活史を描く試みである。そこで第二章「宗門改帳の整理法」では，極めて豊富な記載内容をもち（「現住地主義」で書かれているながら，出稼中の家族員の動静も記録されているため，「本籍地

主義」に読み替えることもできる), また 97 年間一冊の欠落もない同村の宗門改帳を素材としつつ、著者の開発した宗門改帳の整理法が紹介された。つまり、宗門改帳の一切の情報を書き込む「基礎シート (BDS)」の作成方法が示された後、この「ベースキャンプ」を出発点としながら、「静態人口統計シート」、「世帯シート」、出産率算出のための国際的に共通の形式である「家族復元フォーム」、そして生涯の「履歴書」を意味する「個人行動追跡シート」を作成する過程が示されたのである。

第三章では「西条村とその周辺」に話題が移り、まず当地の江戸後期の状況が概観される。西条村は、商品経済の発達した濃尾平野の輪中地帯に位置する村で、宝暦 13 (1763) 年以降明治維新まで、天領大垣藩預り地に、楡保村の枝村として属した。輪中の村であることは、村民の生活に重要な特徴を与えたという。つまり、生死をかけた水との闘いが日常化したこと、土地の肥沃度は高いが収穫量の年次変動が激しかったこと、江戸時代の内に水防設備の建設にともなう新田開発が大いに進んだこと、湿地地帯ゆえに牛馬の利用・飼育が困難であり、考察時期を通じて牛馬の利用度が極めて低く、逆に農耕に激しい人間の労働が必要であったこと、などがそれである。新田開発に際しては、富裕者が開発地主となることで、開発定住当初から地主・小作関係が存在し、考察時期を通じて、常に全世帯の半数以上が持高二石以下ないし無高の小作層であった。なお、この村は水田稲作を中心としていたが、村内に手工業の特段の発展がなかったため、雇用機会として、他所 (特に尾西織物業地帯・名古屋や大垣などの城下町) への「出稼ぎ」が重要であったという。

続く二つの章では、いよいよ宗門改帳の記録に基づき、西条村の近世後期の人口統計が提示・分析される。第四章「西条村の人口統計 (一)」では、まず村の人口総数が、やや増大を基調としながら、災害年には急な減少を見せる鋸状の変動をくりかえしたことが示される。そして、人口変動

の要因、すなわち自然的要因 (出生と死亡) 及び社会的要因 (結婚・養子・出稼奉公などの移動) について検討が加えられ、主に、出生率は概ね死亡率を上回っていたが、その自然増加分が大量の出稼奉公=人口流出によって相殺されてしまったことが示された。その際、地主層・自作層・自小作層に比し、小作層からの出稼奉公が、人数及び経験率において顕著に高かったこと、中でも都市 (名古屋・京都・大阪・大垣など) への奉公が多かったことが明らかにされた。

次いで第五章「西条村の人口統計 (二)」では、まず結婚に関する基礎的な統計が検討され、全体として独身率が非常に低かったこと、地主層・自作層・自小作層に比べて小作層の結婚年齢が高く、これは奉公経験率の高さに由来したこと、離婚は平均して夫婦 9 組に 1 組の割合で行われ、再婚もしばしば行われたこと、などが明らかにされた。次に家族復元フォームを利用しつつ年齢別・階層別の出産率が算出され、地主層・自作層・自小作層に比し、小作層の出産率が 21—25 歳層を除いて低かったことなどが示された。なお西条村の場合、すでに同種の研究の存在する日本の他村と比べると、比較的結婚が遅く、出産力が高かったという。

第六章「人々の多彩な生涯」において著者は、西条村の個々の村民の生涯を、その家族環境と併せて、宗門改帳に記載のある限りで追跡する。まず、医師となった地主の末っ子「利三郎」の事例、西条村の典型的な農家である小作農「伊蔵」の一家の事例、水呑の「重助」夫婦の三人娘の相異なった人生経路が紹介された後、こうした「生涯史」から見えてくる新しい江戸時代像が示される。特に奉公を契機として、農村民が、「土地に縛りつけられ」ない、高度な地理的移動をともなう人生を経験したこと、その際、奉公をともなう生涯が決して「暗いイメージ」に彩られたものではなく、奉公が結婚=家族形成を可能にし、時には人生の「サクセス・ストーリー」をもたらしたこと、また奉公による移動の激しさが、都市から農村への文

化や知識の伝播を可能にしたことが強調される。さらに「婚姻や養子というチャネル」を通じて異身分間の（とりわけ上層の農民と中下層の武士との間の）激しい人的交流が存在したことが指摘され、また農民相互間で活発であった養子慣行が農家の最適な継承者のリクルートの機能を果たしたのではないかという推論が提示された。一方、こうした「バラ色の世界」に、幼少時の死亡や妊娠・出産時の死亡の多さなどの「人口学的な悲慘」が暗い影を落としていたという事実を指摘すること、著者は忘れない。

本論最後の第七章「西条村人口史と江戸時代」では、以上の西条村に関する考察が、江戸後期の全国的関連の中に位置づけられる。まず著者は、近世後期の全国人口の動向は一般に「停滞」の二文字で済まされてしまうことが多いが、実際には地域ごとにかなりのバラツキがあったという。すなわち、近畿や南関東など都市人口比率の高い地域で人口減少が起きたのに対し、都市人口比率の低い西日本各地では人口が増加し、東日本では都市人口比率が低い場合でも過酷な自然条件により人口が減少したというのである。言い換えれば、江戸時代においては、農村が潜在的に人口増加力を備えていたのに対し、経済発展にともなう都市人口比率の増加が人口減少の作用をもたらしていたのである（経済発展と人口変動との間の負のフィードバック作用）。そうしてこの全国的な関連の中に、大量の出稼ぎ人口を都市へ供給した西条村が、高い出生率と低い死亡率にもかかわらず、その人口増大をミニマムに抑えていたという局地的な関連が、見事にはめ込まれる。その上で著者は、この西条村人口の自動調整メカニズムの内容を掘り下げ、都市へ出稼ぎに参加したのが主として小作層であり、その結果多発した小作層の絶家を上層の分家が補填するという、農民の階層間移動と地理的移動とを組み合わせたモデルを提示したのである。一方、著者は、都市人口比率が低く、江戸時代後期において最も激しい人口増加を経験した西日本の諸藩が明治維新を惹き起こしたことに

言及し、人口増加による社会的緊張が当地の藩士に危機感を抱かせ、大きな政治変革を志向させたのではないかという仮説を示しつつ、日常史と事件史との関わりを示唆した。

なお、本書には、旧版にはなかった付章「人生五十年？ 徳川日本の農民の生涯」が収められている。ここでは、かつての日本人が「人生五十年」という意識ないし感覚をもった所以が、西条村における村民の平均寿命や家督継承パターンの分析を通じて探られた。

論評に移ろう。本書の実証的核心が、西条村村民の人口学的行動及び生涯に関する宗門改帳を用いた分析にあることは明らかだが、著者が、この史料の記録をムラなく体系的に利用するための、国際的に通用する方法を開発し、その手続きを本書において詳細に公開したことは、極めて大きな貢献として注目に値する。そうした体系的な史料分析手続きの開発と公開は、「できるかぎり客観的に」歴史を分析しようとする著者の意図に由来しているのであろうし、それがまた歴史人口学の国内的・国際的比較研究の進展に道を拓いたことは間違いない。

また著者が、西条村の宗門改帳の特性を活かしつつ、とりわけ出稼奉公を中心とした「移動」の実態を緻密に把握し、それを通じて江戸時代の人口と社会のダイナミズムを明らかにしえたことは、本書のもう一つの大きな魅力となっている。まず著者は、農村民の移動性が思いのほか高かったこと、それが家族形成や都市での成功（社会的上昇）をもたらしたこと、などを示すことによって、土地緊縛と結びついた近世農村の「暗いイメージ」を払拭し、新しい江戸時代史像の創出に貢献した。さらに著者は、農村から都市への人口移動に注目しつつ、一見「停滞的」と見られる近世後期日本の人口趨勢の中に、実は経済発展（都市人口比率の上昇）と人口発展との間の負のフィードバック作用というダイナミズムと、またそれに起因する相当の地域差が潜んでいたことを明らかにし、負のフィードバック作用の内実を、西条村のミクロ

データによって詳細に跡付けることに成功した。ここには、E. A. リグリの名著『人口と歴史』（速水融訳、筑摩叢書 275、1982 年〔原著は 1969 年〕）を彷彿とさせるような、ミクロ分析とマクロ分析との刺激的な結合が見られる。

こうしたミクロ分析のマクロ的展開における本書の多大な貢献を認める一方で、一村落の集中調査である本書を純粋なミクロ歴史研究として読むとき、幾分物足りなさを感じるのも事実である。つまり本書は、もっぱら宗門改帳のみを分析対象としたために、近年ヨーロッパで盛んなミクロ歴史学の農村研究（評者の専門であるドイツ農村史の分野では、David W. Sabeau, *Property, production, and family in Neckarhausen, 1700–1870*, Cambridge 1990、及び Jürgen Schlumbohm, *Lebensläufe, Familien, Höfe. Die Bauern und Heuerleute des Osnabrückischen Kirchspiels Belm in proto-industrieller Zeit 1650–1860*, Göttingen 1994 など）が模範的である）や、日本農村に関する中村吉治らのミクロ研究（『村落構造の史的分析——岩手縣煙山村——』日本評論新社、1956 年）のように、種々の史料を組み合わせて、限定された地域における社会諸関係に関するより立ち入った、しかも総合的な把握を試みることはなかったのである。その点を以下に敷衍しよう。

第一に、本書は、西条村村民の人口学的行動と生涯の分析の中で、出生、死亡、婚姻、奉公、養子縁組、継承、分家などといった社会関係の発生・変更・終了の諸局面を取り上げているが、宗門改帳に史料を限定したために、それらの出来事がある時点で発生したという、いわば「乾いた事実」を語るのみで、ヨーロッパのミクロ歴史研究のように、その出来事の具体的な経緯、各当事者の動機付け、そして当事者相互の利害関係や利害対立などを具体的に生き活きと描写しようとはしない。なお、ヨーロッパのミクロ歴史研究者はそうした描写を、ローカルな紛争事件に関する各種プロトコル（供述調書）などを基に行うのであるが、そう

したローカルな紛争事件やその処理の過程には、その土地の日常の秩序が見え隠れするし、また逆に、紛争解決の積み重ねが日常のルール・規範を作り出している。その限りで「日常」と「事件」は不可分の関係にあるのであり、記録の残る「突発的な事件」と、ほとんど記録の残らない「日常」とを区別して論ずる本書の著者には、あまり賛成できない。もっとも、著者が本書の最後で問題とした明治維新の如き全国規模の「大事件」は、その限りではないのかも知れないのだが。

第二に、例えば上述の中村吉治らによる研究は、各種の史料を用いつつ、煙山村における家組織、農業労働組織、水利組織、林野の利用組織、生活組織、土地所有関係、商品経済関係をすべて問題にしたのだが、宗門改帳に特化した本書は、西条村の社会諸関係の総合的把握をめざすことを敢えてしない。輪中の村であるということが西条村にとって決定的な要因であるとすれば、その水利関係のありようが気になるし、また湿田地帯であるがゆえに同村で労働集約型の農家経営が行われていたとすれば、その実態や影響にも関心が湧く。また、土地所有関係についても次のような指摘ができよう。著者は、従来の日本経済史の主流が、農村の階層変動をもっぱら農民層分解（農民層の土地市場を介した両極分解）によって説明してきたことに距離を置きつつ、むしろそれを分家などの家産分割と関連付けながら説明している。このこと自体が、従来の研究を相対化する重要な貢献であることは確かなのだが、しかし、土地市場が階層変動を考える上で不可欠の要因であることに依然としてかわりはない。その意味で、分家と土地取引との両面から階層構造の変化を探ろうとする中村らの分析が注目に値するのである。なお、本書と同様の家族復元分析を内包するドイツのミクロ農村史研究においては、家族戦略と土地市場との両面考察はもはや常識になっていると言ってよい（Stefan Brakensiek, “Farms and land – a commodity? Land markets, family strategies and manorial control in Germany, 18th–19th

centuries”, in B. J. P. van Bavel/ P. Hoppenbrouwers eds., *Landholding and land transfer in the North Sea area, late Middle Ages – 19th century*, Corn Publication Series 5, Turnhout 2004, を参照)。

ともあれ、以上のミクロ歴史研究の観点からする問題提起は、宗門改帳に集中してそれを体系的に分析し、この史料の豊かな可能性を世に示そうとした本書の価値を些かも減ずるものではない。むしろ本書の着実な成果は、ミクロ歴史研究者を

も含めた後学の問題関心を大いに刺激するものであったし、そうであり続けるであろう。本書が今後も広く読み継がれるべき、民衆史研究の信頼しうる「ベースキャンプ」ないし「基礎工事」であることを確認した上で、以上の書評を締めくくりたい。

飯 田 恭
(経済学部助教授)